

## 水戸城下における 17 世紀中頃と 19 世紀中頃における 禄高別拝領屋敷地の分布

Analysis on distribution of warriors' residences by their salary in the  
middle of 17th century and in the middle of 19th century in Mito castle  
city

田中耕市\*, 小野寺 淳, 永井 博, 小橋雄毅

Koichi.Tanaka

茨城大学 人文学部, 水戸市文京

Ibaraki University, Bunkyo, Mito City

**あらまし:**本研究では寛文 9(1669)年写しと推定される「水戸上町図・下町図」,ならびに幕末期の「常陸国水戸図」をもとに,2時点における禄高別拝領屋敷地の分布をGISによって明らかにする。藩士の禄高と家格などの属性は,元禄 12(1699)年以降の家譜「水府系纂」(元禄 12 年~慶応 3 年),ならびに「寛文規式帳」と「江水御規式帳」(天保 11 年)で補完してデータベース化した。拝領屋敷地の区画には,文政 9(1826)年原図と推定される「水戸地図」に基づいて作成した「水戸城下町マップ」のデータを利用した。

**Summary:**In this study, spatial distribution of warriors' residences in two points in time are clarified by using GIS on the basis of two old maps: "Mito-uwamachizu-shimomachizu" estimated to be copied in 9th year of the Kanbun era (1669) and "Hitachinokuni-mitoku" drawn in the end of Edo era. We built database of warriors attributes including salary and family rank from these maps and warriors genealogical trees, such as "Suifu-keisan", "Kanbun-kishikicho", "Kosui-on -kishikicho". Land partition data of warriors' residences was created from "Mito-jokamachi-map" made on the basis of "Mito-chizu" estimated to be drawn in 9th year of the Bunsei era (1826).

**キーワード:** 水戸, 城下絵図, 武士, 拝領屋敷, GIS

**Keywords:** Mito, castle town pictorial, samurai, warriors' residences, GIS

### 1. はじめに

水戸は 35 万石の水戸徳川家の城下町である。水戸藩の家臣の半数以上は江戸詰め, 半数以下が水戸詰めであった。天保年間「水戸上下御町丁数調書」(茨城県立歴史館蔵)によれば, 武士 753 戸, 町人 1,833 戸と記されている。本報告は寛文 9 (1669) 年写しと推定される「水戸上町図・下町図」,ならびに幕末の嘉永 5 年~安政 3 年頃と推測される「常陸国水戸図」(国立公文書館蔵)の拝領屋敷に記載された藩士名と,元禄 12 (1699) 年以降の家譜「水府系纂」(元禄 12 年~慶応 3 年),ならびに「寛文規式帳」と「江水御規式帳」(天保 11 年)で補完して藩士の録高などをデータ化し,主に江戸前期と後期における水戸城下の武士の禄高と

居住の関係を GIS で分析することを目的とする。

天正 19 (1591) 年, 佐竹氏は太田城から本拠を水戸城に移し, 佐竹氏による本丸・二の丸・浄光寺曲輪などの造成が行われた。慶長 7 (1602) 年に 佐竹氏が秋田へ国替えとなり, 武田信吉 (家康 5 男) が水戸 15 万石に封ぜられた。その後, 慶長 14 年, 徳川頼房 (家康 11 男) が水戸に転封 (25 万石), 初代水戸藩主となった。翌年, 伊奈備前守忠次は千波湖用水を開き, 備前堀が完成する。寛永 2 (1625) 年には水戸城の改修が開始 (1638 年完成) され, また千波湖を干拓して田町を開設し, 上町の商人を田町に移し, 武家地と町人地からなる下町が形成されていく。これを「田町越え」と呼び, 近世城下町水戸がほぼ完成する。やがて正保

国絵図編纂事業の中で水戸城絵図も作成され、千波湖の中に上町と下町を往来する堤が築かれ、新道となった。また、寛文2(1662)年には下町の飲料水として笠原水道を創設、翌年に完成した。寛文6年には寺院整理による城下寺院の移転が行われた。徳川光圀は元禄3(1690)年に千波湖を通る新道を「柳堤」と名づけ、この頃に町名の改称と地区の整理が行われた。

元禄14年、水戸藩の表高は35万石となる。水戸徳川家の藩主は江戸で居住することが多く、家臣もやがて江戸詰めと水戸詰めとの交代が少なくなった。このため、9代藩主徳川斉昭は江戸詰めと水戸詰めとし、天保7(1836)年に城下外の西部に侍屋敷を整備し、屋敷割を行った(新屋敷、現在の新荘1丁目、3丁目など)。また、海防のため、三の丸に屋敷があった家老の山野辺家を助川城(日立市助川)に移し、三の丸には天保12年に弘道館仮の仮開館、翌年には借楽園開園となり、幕末を迎える。

## 2. 研究対象とした水戸城下絵図

### (1) 城絵図と城下絵図

本研究では、まず水戸城下を描いた近世絵図の現存を調べ、水戸城・水戸城下図一覧を示した(表1)。ただし、これらのなかに水戸城下町を実測した江戸時代の測量図はなく、その多くは写図である。この中で、比較的正確な城下の図は、正保水戸城絵図と水戸地図である。

正保水戸城絵図は江戸幕府の国絵図編纂事業のなかで水戸藩によって正保元(1644)年に作成された。この城絵図には、水戸城の改修、さらに千波湖と那珂川の合流部を干拓した田町開設と田町越えによる下町が表現されており、正保水戸城絵図はほぼ完成した近世水戸城下の構造を示すといえよう。

水戸城絵図には拝領屋敷に居住する武士名の記載は無い。この城絵図をベースに、武家地の屋敷に武士名を記載した城下絵図が、水戸市立博物館所蔵の水戸上町図と水戸市田町図である。武士名より、両図は寛文9(1669)年頃の作成と推定され、本研究では両図を研究対象とした。

水戸城下の変遷の中で、近世後期の水戸城下を比較的正確に描いたと考えられるのは、公益財団法人徳川ミュージアム所蔵の「水戸地図」である。水戸地図という名称は後年に付されたものであり、本来は城下絵図、あるいは屋敷割図と称すべき絵図の写本である。

この絵図に示された拝領屋敷の区画をもとに、現地で土地の高低、間口・奥行などを歩測によって調べ、デジタル版の水戸市都市計画図に拝領屋敷の区画を示した。ただし、水戸地図は実測図ではないため、これらの区画は必ずしも正確とは言えない。水戸地図には天保元年に酒井喜熙が模写したと記されており、その原本は雨宮端亭(1758-1832)作製の「水戸諸士宅地図」ではないかと推測される。清水正健著『増補水戸の文籍』(1934年)によれば、「水戸諸士宅地図」は文化9(1812)年成ると記す。記載された武士名から、水戸地図は文政9(1826)年と考えられ、いずれにしても化政期の拝領屋敷の区画と判断して良いであろう。以上より、本研究では、化政期の水戸城下の土地区画を現在の国土基本図に推定して作製したデジタル版水戸城下町マップ(図1)を、GIS分析のベースとすることにした。

江戸時代後期の屋敷割を記載しているのが、国立公文書館所蔵の「常陸国水戸図」である。太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局旧蔵と記載されている。絵図には、小路ごとに町名が振られており、武家の屋敷地については一筆ごとに居住藩士の姓名が記載されている。一部の屋敷地には、居住者の禄高が記載されている例もある。制作時期は、「太田丹波守」「山野辺主水正」などの叙任関係年月から嘉永5(1852)~安政3(1856)と推定される。しかし、後年の加筆・修正の跡が見られる。絵図全体を見ると、本丸や武家屋敷地は簡素に描かれている。このほかに、寺社の境内や鳥居、通りに設置されている門が描かれており、絵画的表現がなされているものもある。加えて、城下の南北にある千波湖と那珂川には、魚や鳥の姿が描かれている。本図は水戸上町図・水戸下町図と同様に城下が東西に直線的に描かれており、実測図ではない。

### (2) 千波湖の大きさ

水戸城下の特色の一つは、城下に囲まれた千波湖の存在である。千波湖の大きさが特定されないと、水戸城下の範囲が特定できない。今回、千波湖土地改良区所有の測量図の利用が可能となり、千波湖の正確な規模と範囲が明確となった。内題「千湖分間全圖」は、水戸徳川家の公益財団法人徳川ミュージアムのホームページに同様の絵図が公開されたことから、千波湖土地改良区所有の図は藩政用の控図と考えられる。図右上に記された序には、「壺間以曲尺五里之積記之」と記載されている。図左下に記された跋文には「是圖以長

五里為一步 凡水湾屈曲皆如圖 若其山林川流田野道程則記 其梗概耳 安政二年歲次乙卯秋八月製之」と記され、安政2(1855)年8月の作成であったことがわかる。また5里を1歩と記載しており、1歩6尺(但し、天保検地では6尺5寸)とすれば、縮尺は約11,000分の1である。なお、図の右上の序と左下の跋に近くには方位円が押されている。

序には千波湖の広さを「総坪数四拾三万八千六百八拾三坪 東西長千七百間此町貳拾八貳拾間」と記す。438,683坪は1,447,654 m<sup>2</sup>の広さとなる。この絵図を現在の地形図に比定して計算すると、千波湖は1,619,350 m<sup>2</sup>となり、現在の約4.88倍にもなる。

凡例には黄色丸印は道、墨丸印は田、薄墨丸印は芦、墨丸印は山、水色丸印は水、赤印は九通印と記されている。湖の広さを計測するため、湖内の4か所に南北を通した朱線が引かれており、湖を五分割して面積を算出したことがわかる。この面積は西から75,396坪、75,544坪、77,002坪9厘、81,413坪7分6厘、91,336坪である。さらに柳堤の内側を二分割した面積はそれぞれ13,401坪6分、24,590坪と記されている。これらを合計すると438,683坪となり、序文に記載された総坪数と合致する。

さらに4つの朱線には、西から337間、192間、182間、290間との記載があり、船上から間縄のようなもので距離を測ったと考えられる。湖岸の9か所で22の方位を測定しており、それぞれ方位を記載している。湖岸から船までの座標と距離を計算するために三角測量を使い、船までの直線と湖岸がなす角度を測定する。湖岸で角度を計測した測定箇所間の距離を測り、正弦定理を利用して船までの距離を求めることができる。しかし、図には湖岸の測定箇所間の距離を記載しておらず、いかに面積を算出したかは、今後の課題である。いずれにしても、本図をデジタル版水戸城町マップに反映させた。

### 3. GISを援用した城下復原

本研究では、まず拝領屋敷の区画を空間データ化するとともに、拝領屋敷の所有等の情報を付加していく。さらに、複数の時期の城下絵図を比較・分析するためには、拝領屋敷の区画ポリゴンの管理を工夫する必要がある。本稿では、それらの城下絵図の空間データを作成する工程と管理方法について説明する。以下では、1)絵図と地図の重ね合わせ、2)区画のポリゴン化、3)

屋敷地ポリゴンのナンバリング、の順で記す。

#### (1) 絵図と地図の重ね合わせ

分析対象とする二枚の城下絵図はともに実測ではなく、歪みも大きい。GISのジオリファレンス機能を用いての現代地図との重ね合わせは難しい。一方で、絵図に描かれている道や拝領屋敷のシマ(拝領屋敷が連なって形成される街区)の多くは、その形状から現在の水戸市で相当する道路や街区を見いだすことができる。そのため、城下絵図における拝領屋敷のシマのポリゴンは、ジオリファレンス機能を使用せずに、現在の地図データから生成することにした。具体的には、城下絵図に描かれている道の交差点や曲がり角に相当する箇所を現在の地図から特定して、GIS上で拝領屋敷のシマのポリゴンを作成した。そのため、拝領屋敷地の区画の面積や道幅については、正確に再現することはできない。

#### (2) 区画のポリゴン化

続いて、上記の手順で作成したシマのポリゴンに、拝領屋敷の境界線を加えていく。城下絵図には、それぞれの拝領屋敷の区画の大きさの情報は記されていないため、それを正確に区画ポリゴンに反映させることはできない。例えば、一つのシマに5軒の拝領屋敷が連なっている場合、区画の大きさに多少の差異はみられるものの、シマが5等分されて描かれていることが多い。実際には、5軒の拝領屋敷の区画の大きさには差異があったとしても、それが絵図に反映されていない。さらに、現在の地図の土地区画からも当時の拝領屋敷の区画を類推することも難しい。そのため、絵図においてシマを等分して描かれている拝領屋敷は、そのままシマを等分して屋敷地ポリゴンを作成することにした。

はじめに常陸国水戸城絵図から屋敷地ポリゴンを作成した後に、編集を加えて、水戸地図の屋敷地ポリゴンを作成した。この二時点間では、拝領屋敷の区画の分筆や合筆が散見されるため、必ずしも1対1で区画が対応しない。特に、どの区画が分筆されたのか、あるいは、どれらの区画が合筆されたのかが明瞭ではないことが、ポリゴンを作成するうえで問題となる。例えば、常陸国水戸城絵図においてシマが5等分されていた拝領屋敷の区画が、水戸地図では6等分されていることがある。この場合は、もとの5つの屋敷地を統合して6等分したことは考えにくく、特定の1つの屋敷地を2つに分筆したと考えるのが常識的であろう。しかし、およそ180年という長い時間を経る間に、各屋敷を所有

する武家も入れ替わっており、どの屋敷地の区画が分筆されたのかを判別することができない。逆に、シマが5等分されていた屋敷地が4等分に合筆された場合も同様であり、どの区画が合筆されたのかがわからない。このような場合には、文政年間における屋敷地ポリゴンは、水戸地図に描かれている通りに、シマのポリゴンを等分して作成した。

### (3) 屋敷地ポリゴンのナンバリング

次に、作成した個々の拝領屋敷地のポリゴンを識別するために9桁のナンバリングを行った(図2)。このナンバリングによって、拝領屋敷地が含まれるシマや、二時点間における区割りの変更の有無を一元的に把握することができる。まず、城下町を大きく3つの大区画に分割してL桁に1~3の番号を振り、それぞれの大区画の中のシマに2桁の番号(M1M2)を振った(図3)。すなわち、各シマは先頭の3桁の番号(LM1M2)で表される。

次に、シマの3桁の番号に加えて、それぞれの拝領屋敷地のポリゴンの番号を追加する。上述の通り、二時点間で分筆や合筆が散見されるため、拝領屋敷地の区画は二時点でのそれぞれの番号を振ることにした。すなわち、常陸国水戸城絵図における2桁(S1S2)の番号と、水戸地図における2桁(U1U2)の番号の合計4桁の番号である。図4には、さまざまな区画の変更状況に応じてのナンバリング方法を例示した。仮に、二時点間で区画の変更が無ければ、同じ2桁の番号が2つ並ぶことになる。異なる時点において対応する区画が明瞭でない場合には99を入力する。例えば、常陸国水戸城絵図における15(S1S2)の拝領屋敷地の区画が、水戸地図においてどの拝領屋敷地の区画に相当するかの対応関係が不明瞭の場合、U1U2には99を入力した。

先頭から8桁目のT桁は区画ポリゴンの時点を示し、常陸国水戸城絵図の場合には0、水戸地図の場合には1を入力する。末尾の桁は、常陸国水戸城絵図から水戸地図までの二時点間における区画の変更の有無を示し、変更が無かった場合に0、変更があった場合には1を入力する。そして、ナンバリングを終えた拝領屋敷のポリゴンには、絵図から読み取った武家の情報を属性データとして追加した(図5)。

## 4. 本研究で利用する家譜

城下町の拝領屋敷分布を考察するための基礎史料とな

る水戸藩士関係史料で、現在知り得るものは3種類であるが、本研究では以下の3種類を利用する。

### (1) 水府系纂

家臣の系図、家譜を編集したもの。まず、延宝6年(1678)に2代藩主徳川光圀が用人山縣元纜に命じ、藩草創期からの家臣について編纂、「水城実録」としてまとめさせている。ついで元禄14年、3代藩主徳川綱條は彰考館の佐野郷成に命じて「水城実録」をもとに「水府系纂」の編纂を命じた。これは2年後に成ったが、さらに宝永7年(1710)、佐野に増補改訂を命じ、さらに正徳2年(1712)には旧彰考館員の伴武平暢にも手伝いを命じた結果、享保2年(1717)に完成した。その後も家ごとに書きつがれ、最終的に慶応3年(1867)に目録2巻、正編92巻、附録4巻となった。

ほかに、9代藩主徳川斉昭が彰考館員に命じ、藩初からの郷士、同心、手代、中間、諸細工人、水主などについてまとめさせた「水府系纂附録」がある。

編さんの引用書として、「彰考館所蔵系図纂」、「平家物語」、「東鑑」などのほか、「萬千代君古帳」、「元和年中大番帳」「寛永三年御上洛行列」などの藩有の記録など34部があげられている。

内容は、頼房に最初に付された家臣たちである「慶長年中奉仕於伏見之輩(1・2巻)」を冒頭に置き、以下「慶長十二年奉仕於駿府」「同十三年附属信吉十七騎與力之輩(3巻)」「慶長十四年奉仕於駿府之輩(4~8巻)」「慶長年中奉仕於駿府之輩(9~17巻)」「元和元年奉仕於駿府之輩(18~20巻)」「元和年中奉仕於駿府之輩(21~22巻)」「元和四年奉仕之輩(23~25巻)」「元和年中奉仕之輩(26~29巻)」「寛永年中奉仕之輩(30~41巻)」というように、年号ごとに来仕した藩士の系図、家譜がまとめられている点に特色がある。途中で断絶した家についても記載されており、水戸藩士についての履歴調査の基本史料である。

原本は徳川ミュージアムに伝来しているが欠本もある。なお、マイクロ撮影紙焼版は茨城県立歴史館で閲覧可能である。

### (2) 寛文規式帳(成立1669年)

別名を「水府御規式分限」という。2代藩主光圀時代の寛文9年に作成された。「家老」以下「方丈様」まで117種の職ごとに、原則として家臣の知行高・切米・扶持高と氏名が記載されている。

記載されたのべ人数は1,564人、兼帯を除いた実人

数は1,483人となる。そのうち禄扶持高などがわかるのは1,009人であるが、これについては大まかな分析がされている。それによると記載の知行取は63.2%にあたる638人で、うち1,000石以上約4.1%、500石以上約5.2%、100石以上約87.3%、このほか約3.4%となっている。また、切米・扶持方371人の高別は52種で、35両7人扶持から7人扶持までの幅がある。原本は徳川ミュージアム所蔵。翻刻版は『茨城県史料 近世政治編I』に収録されている。

### (3) 江水御規式帳（成立1840年）

「江水」とは江戸と水戸の意である。江戸詰と水戸在勤の藩士について勤務地が区別できるように記載されている。天保11年（1840）5月に、当時水戸藩に在籍した長嶋尉信によって筆写されたものである。

長嶋尉信は、通称治左衛門（のち二左衛門あるいは三太郎）号は郁子園、二州。土浦藩領筑波郡小田村小泉吉則の二男として天明元年（1781）に生まれ、名主である長嶋家の養子となった。43歳のとき江戸で暦数を学び、45歳で隠居してからは農政研究に没頭、「不算得失」などの地方書を多く著した。天保10年、折から徳川斉昭による領内総検地の準備中であつた水戸藩に招かれ「御土地御郡方勤」として10両5人扶持の禄を給され、検地事業に従事した。その後、天保12年には土浦藩に招かれ、慶応3年に86歳で歿した。

記載内容は、家老以下の諸職ごとに江戸、水戸の勤務地の別を記号で示し、姓名、扶持高を記し、さらに主要家臣については役職就任年月をも記載しており、これは「水府系纂」の履歴記事とも一致するものが多い。ほかにも朱筆や青筆で多くの書き込みがある。手代や鷹司家に嫁いだ鄰姫（治紀娘）や高松藩主松平頼起に嫁いだ述姫（治保娘）などの付き人まで姓名を記載、奥付によるとのべ3,550人にのぼっている。原本は個人蔵だが、昭和46年（1970）に茨城県史編さん近世史第一部会によって翻刻されたものが小冊子として刊行されている。

## 5. 考察

以上の手順と家譜史料により、水戸城下の拝領屋敷と禄高を地図化した。寛文9（1669）年から天保11（1840）年の約170年間に、下記のような変化を読み取ることができる。

図6には寛文9年における禄高別拝領屋敷の分布を

示した。城郭付近は家老を中心とした上級家臣、城下の西縁は下級家臣の屋敷が分布しており、禄高に応じた屋敷割りがほぼ維持されていたことが確認できる。すなわち、「水戸上町図」「水戸下町図」（水戸市立博物館所蔵）における正保4年～明暦元年頃と、その分布の傾向に大きな変動はないと考えられる。

しかし、徳川斉昭によって推進された天保改革により、いくつかの変化が見られる。図7には天保11年における禄高別拝領屋敷の分布を示した。天保12年に重臣屋敷があつた三の丸に弘道館が設置されるが、この前年を図示している。三の丸の屋敷地は無くなり、500石以下の中級家臣の屋敷地が混在し、とくに図8に示した家老中山備前守の陪臣が集住していた備前町は混在が著しい。なお、天保初年の郡制改革（郡を4つに統合し、奉行所を城下に集める）により、舌状台地の北端に北と東の郡奉行所、南端に西と南の郡奉行所が建設され、これにより屋敷地の変更が行われた。また、江戸詰藩士を水戸に移住させるために、城下隣接地に新たに屋敷地が造成された。新屋敷に居住したのは、下級藩士であり、中級藩士は、城下内に屋敷を与えられた（図9）。たとえば、大久保甚五左衛門忠臣は若年寄（御馬廻頭上座）で、禄高300石、足高100石、役料150石、藤田主書貞正は用達、禄高800石、渡辺半助寅も用達、禄高500石、足高300石、役料300石、野中三五郎は重同で、禄高1000石、役料300石であつた。こうしたこともあり、水戸城下の上町、下町にそれぞれ配置された中級家臣の拝領屋敷地では、拝領した家臣の変動が著しい。

## 謝辞

本研究は科研費基盤研究(A)課題番号25244041「GISを用いた近世城下絵図の解析と時空間データベースの構築」（代表者：平井松午）の成果の一部である。

## <参考文献>

茨城県史編さん近世史第1部会（1971）：『江水御規式帳』茨城県。

石川久徴（桃蹊）『水府地名考』天保5年

江原忠昭（1985）：『改訂 水戸の町名 一地理と歴史一』水戸市役所。

高倉逸齋『水府地理温故録』文化・文政期

三鬼清一郎（1978）：水戸藩家臣団の形成過程。名古屋大学文学部研究論集。史学。v.25, p.207-226

水戸市史編さん委員会（1968）：『水戸市史 中巻（一）』

水戸市役所.  
水戸市史編さん委員会(1976):『水戸市史 中巻(三)』  
水戸市役所.

渡辺理絵(2008):『近世武家地の住民と屋敷管理』大  
阪大学出版会.

表1 水戸城・水戸城下絵図一覧

資料名	原図年代	所蔵先	法量(cm)	備考
1. 常陸国水戸城絵図	正保元(1644)	国立公文書館	250.0×419.0	
2. 水戸図(上町)	正保4年(1647)～明暦元年(1655)	国立国会図書館	114.0×150.0	写年代不詳
3. 水戸図(下町)	正保4年(1647)～明暦元年(1655)	国立国会図書館	107.0×149.0	写年代不詳
4. 水戸上町図	正保4年(1647)～明暦元年(1655)	水戸市立博物館		写年代不詳
5. 水戸下町図	同上	水戸市立博物館		同上
6. 常陸国水戸城下古代之図上町	寛文年間	茨城県立歴史館(寄託)	62.0×88.0	安永8(1779)写
7. 常陸国水戸城下古代之図下町	寛文年間	茨城県立歴史館(寄託)	62.0×88.0	同上
8. 常州水戸城図	寛文年間	茨城県立歴史館	80.0×110.0	写年代不詳
9. 水戸古図(川方本)	寛文年間	国立国会図書館	83.0×173.0	文政7(1824)写
10. 水戸古図(小田本)	寛文年間	国立国会図書館	76.0×109.0	文化9(1812)写
11. 古水戸屋敷割図	寛文年間	茨城県立歴史館	78.0×108.0	写年代不詳
12. 水戸城下之図	延宝7(1679)～元禄元(1688)	水戸市立博物館	78.0×183.0	写年代不詳
13. 水戸絵図	延宝7(1679)～元禄元(1688)	茨城県立図書館	84.0×197.0	写年代不詳
14. 水戸絵図	享保16(1730)～延享元(1744)	水戸市立博物館	70.0×146.0	幕末写?
15. 水戸城下絵図	享保16(1730)～延享元(1744)	大山守大塚家保存協会	70.5×145.5	安永3(1774)写
16. 常州水戸絵図	明和6年(1769)～安永3年(1774)	茨城県立歴史館	68.0×106.7	写年代不詳
17. 水戸御城下絵図	明和6年(1769)～安永3年(1774)	水戸市立博物館	70.5×110.0	写年代不詳
18. 水戸城下絵図	明和6年(1769)～安永3年(1774)	幕末と明治の博物館	63.0×163.0	写年代不詳
19. 水戸城下絵図	天明9(1789)	水戸市立博物館	39.0×85.5	近代以降
20. 水府武鑑御屋敷附	寛政5(1793)	茨城県立歴史館	24.5×11.3	
21. 水戸地図	文政9(1826)	徳川ミュージアム	92.0×134.0	天保元(1830)写
22. 水藩画図	天保2(1831)	水戸市立博物館	28.0×77.4	天保11(1840)
23. 水戸城上市絵図写	天保2(1831)?	茨城県立歴史館	40.0×102.0	大正6(1917)写?
24. 天保時代水戸地図	天保期前半	水戸市立博物館	43.0×111.5	写年代不詳
25. 新荘地区新屋敷絵図	天保年間	林明日子家		
26. 常陸国水戸城絵図	天保11(1840)	徳川ミュージアム	106.5×150.0	写年代不詳
27. 水戸城下絵図写	天保12(1841)以降	水戸市立博物館	35.1×76.5	近代以降
28. 御家中屋敷帳	弘化2(1845)	茨城県立歴史館	14.2×37.2	
29. 常陸国水戸図	嘉永5(1852)～安政3(1856)	国立公文書館	52.0×147.0	
30. 水戸城下絵図	安政5(1858)	茨城県立歴史館	39.5×52.5	大正6(1917)写
31. 檜物町裏三丁目絵図面	万延元(1860)	茨城大学図書館	33.2×24.0	
32. 本五町日本六丁目絵図面	万延元(1860)	茨城大学図書館	33.2×24.0	
33. 白銀町絵図面	万延元(1860)	茨城大学図書館	33.2×24.0	
34. 裏五町目塩町絵図面	万延元(1860)	茨城大学図書館	33.2×24.0	
35. 本七丁目絵図面	万延元(1860)	茨城大学図書館	33.2×24.0	
36. 裏六町目裏七町目材木町絵図面	万延元(1860)	茨城大学図書館	33.2×24.0	
37. 下金町一～四丁目絵図	万延元(1860)?	水戸市立博物館	34.0×24.0	
38. 水戸城実測図	明治年間	茨城県立図書館	142.0×154.0	

堀口友一(1981):『今昔 水戸の地名』暁印書館.



図1 水戸市都市計画図に拝領屋敷の区画を示した「水戸の城下町マップ」  
 (小野寺淳作成, 茨城大学図書館発行)

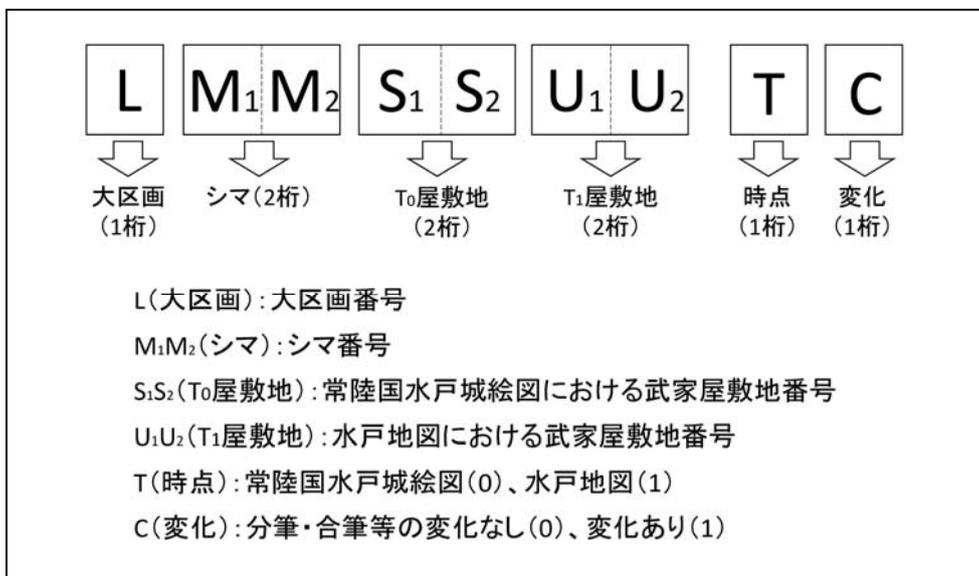


図2 屋敷地ナンバリングのルール  
 (田中耕市作成)

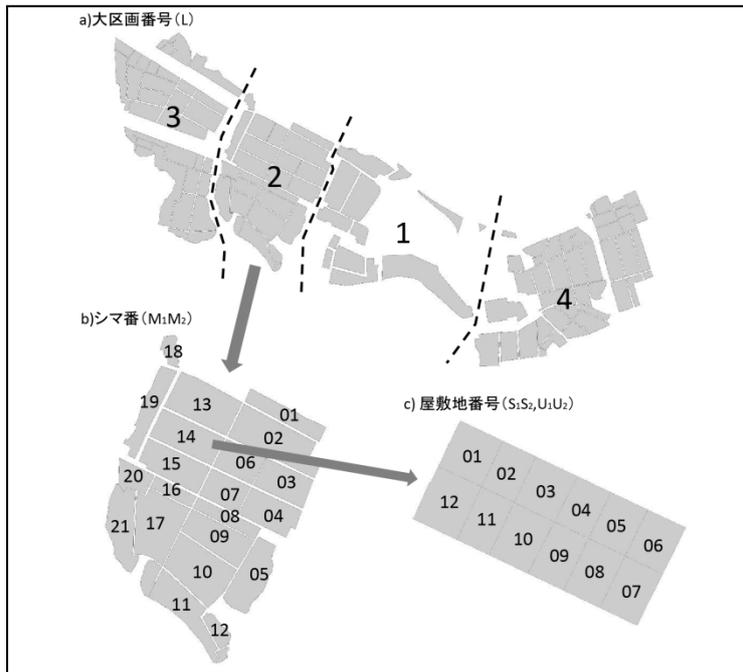


図3 屋敷地番号の階層構造

(田中耕市作成)

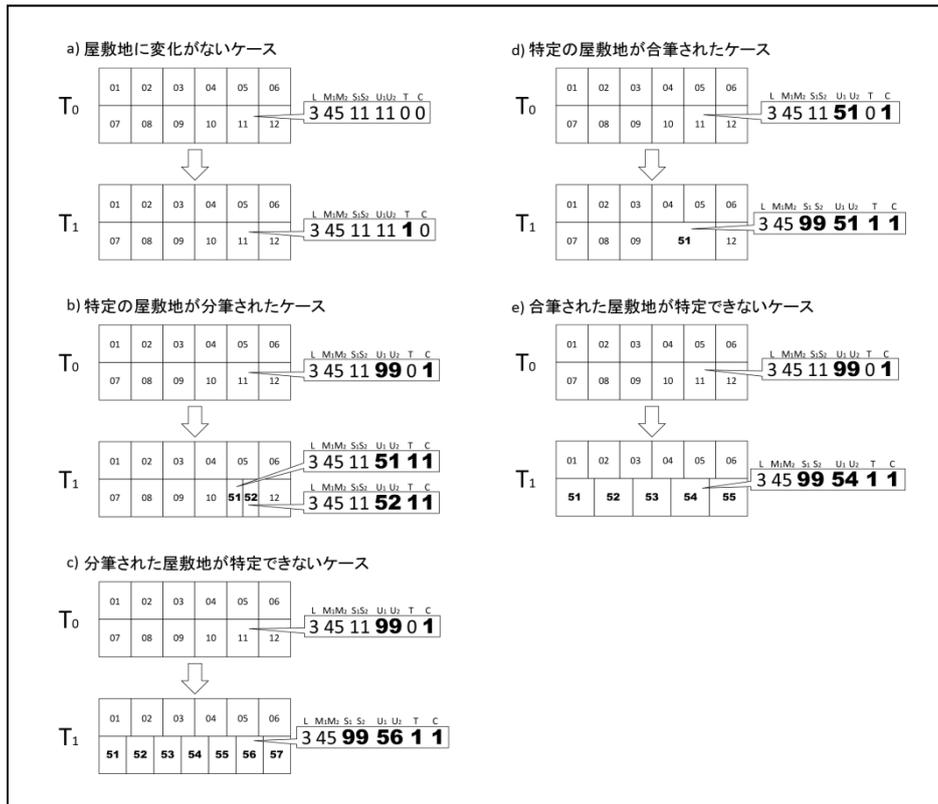


図4 屋敷地ナンバリングのルール

(田中耕市作成)

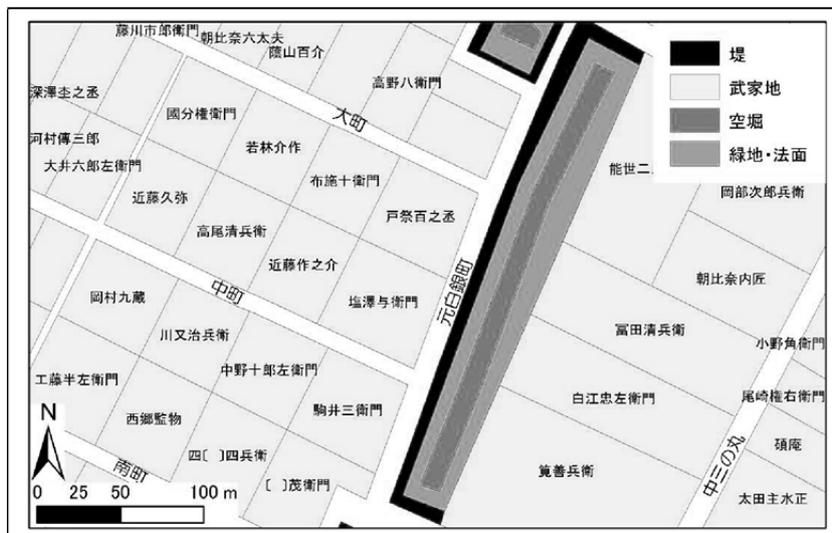


図5 属性データを追加した拝領屋敷ポリゴンデータ (田中耕市作成)

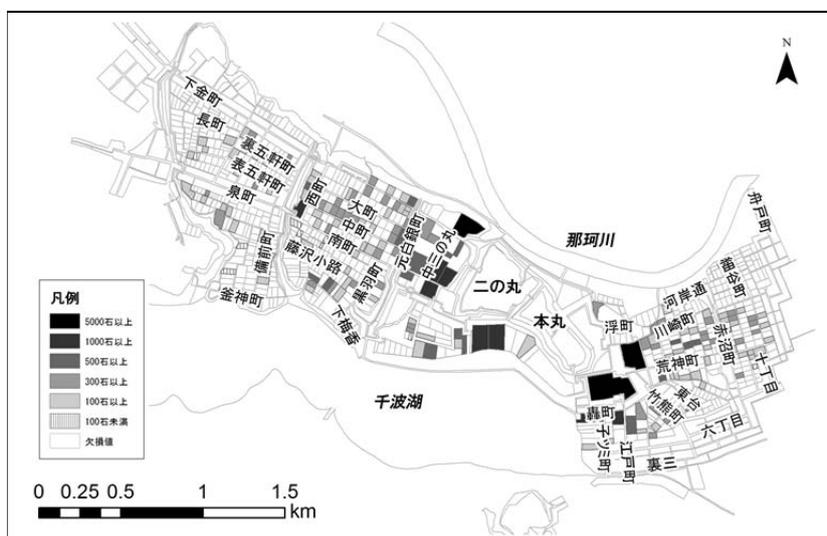


図6 寛文9(1669)年における禄高別拝領屋敷の分布 (小橋雄毅作図)

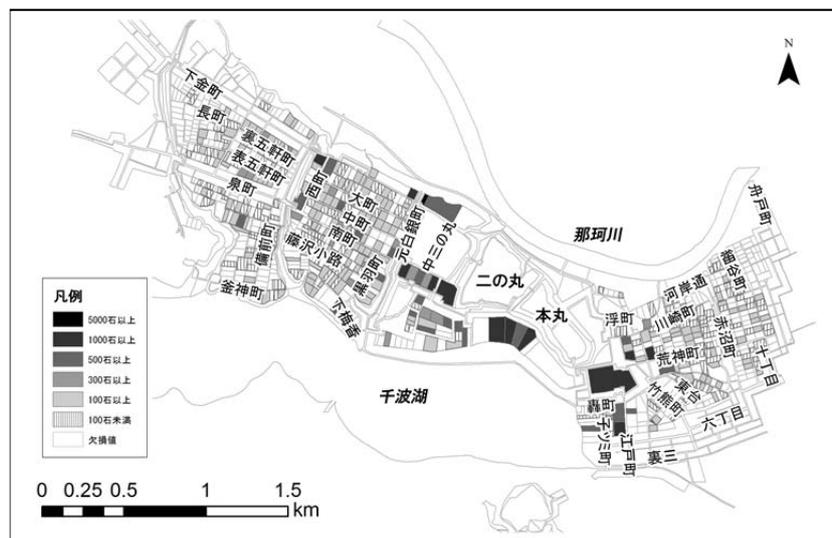


図7 天明11(1840)年における禄高別拝領屋敷の分布 (小橋雄毅作図)

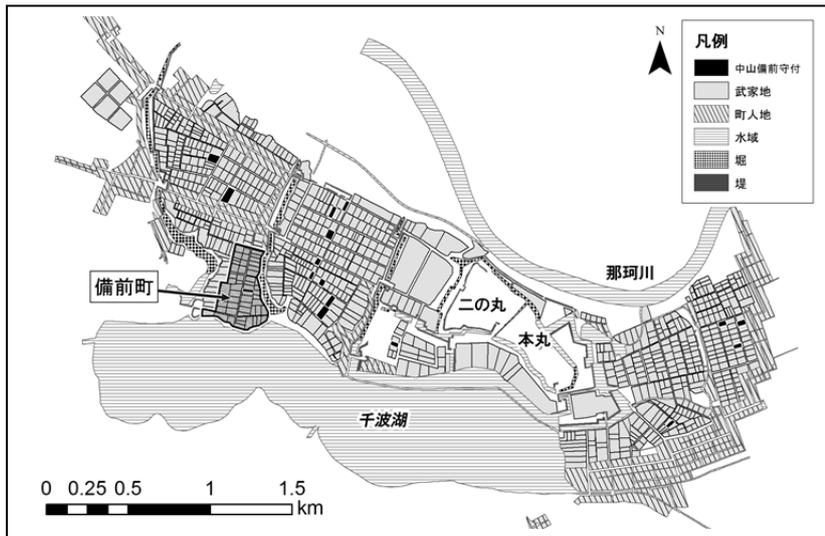


図8 天保11（1840）における陪臣の拝領屋敷の分布

（小橋雄毅作図）

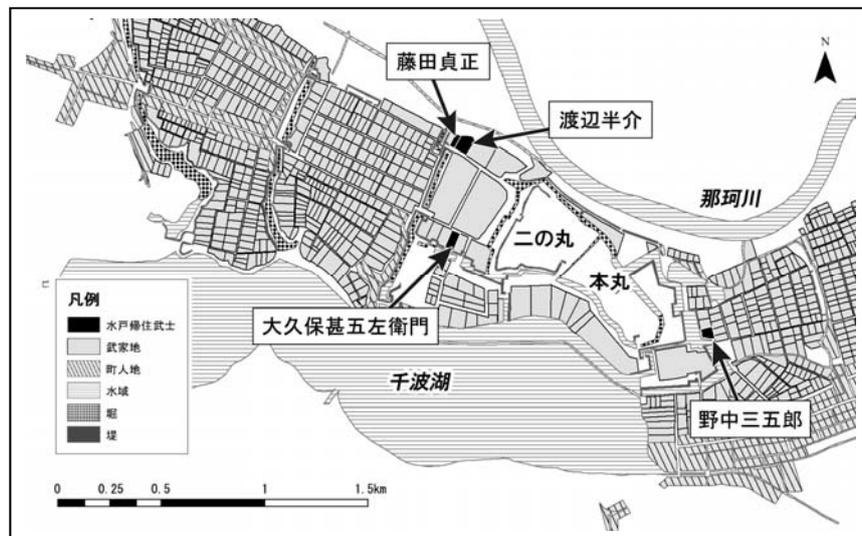


図9 天保七年の改革で水戸城下へ移動した江戸詰の上・中級家臣の拝領屋敷

（小橋雄毅作図）